



KOREA
2024

KOREA 2024

ライフキャリア特別セミナー I

参加学生

[3 年]

藤本 彩

春木 野々花

長谷川 姫奈

猪 未羽

久保 亞彩華

中村 優花

梅岡 優真

山本 梨乃

芳川 真歩

[2 年]

敦田 和奏

堀井 紗友

亀山 月菜

香本 光陽

引率教職員

窪田 勝文

塚野 路哉

日程

9/3（火）

広島駅集合

> 新幹線にて博多駅へ

> バスにて福岡国際空港へ

> 空路：仁川国際空港へ

> 専用車にて移動

■アモレパシフィック新社屋 [Amorepacific headquarters]

■ザ・現代ソウル [The Hyundai Seoul]

ユガネタツカルビ明洞駅店にて夕食（タツカルビ）

ホテル（メイブレイスソウル）チェックイン

ホテルにて振り返り学修

9/4（水）

ホテルにて朝食、チェックアウト

> 専用車にて移動

■ミメシスアートミュージアム [Mimesis Art Museum]

名家金浦チャムスッカルビにて昼食（石焼ビビンバ）

■ギャラリー百貨店光教店 [Galleria In Gwanggyo]

Galleria In Gwanggyo にて振り返り学修

Galleria In Gwanggyo にてフリーショッピング、夕食（各自）

周辺市街見学

> 専用車にて太邱へ移動

ホテル（太邱グランドホテル）チェックイン

9/5（木）

ホテルにて朝食、チェックアウト

> 専用車にて移動

■思惟園展望台 [Saya Park (SAYUWON), Miradouro Sodae]

■思惟園美術館 [Saya Park (SAYUWON), Soyoheon Art Pavilion]

■思惟園教会 [Saya Park (SAYUWON), Naesim Nakwon]

思惟園 Sadam にて昼食（コース料理）

> 専用車にてソウルへ移動

高速道路サービスエリアにて夕食（各自選択）

ホテル（メイブレイスソウル）チェックイン

ホテルにて振り返り学修

9/6（金）

ホテルにて朝食、チェックアウト

> 専用車にて移動

■DDP 東大門デザインプラザ見学 [Dongdaemun Design Plaza]

DDP 周辺でフリーショッピング、各自昼食

■松隠アートキューブ [ST International HQ and SONGEUN Art Space]

> 空路：福岡国際空港へ

> バスにて博多駅へ

> 新幹線にて広島駅へ

広島駅着、解散

DAY1

Amorepacific headquarters

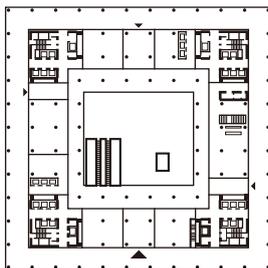
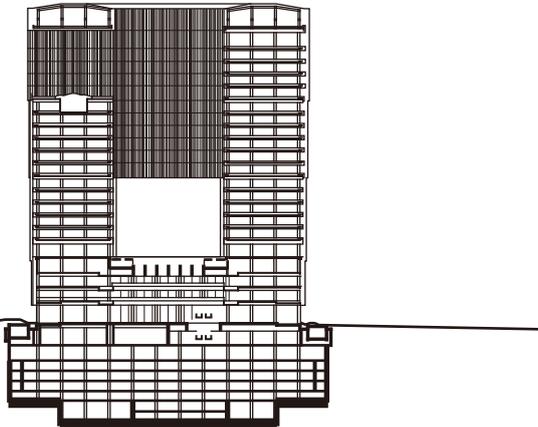
David Chipperfield
2010

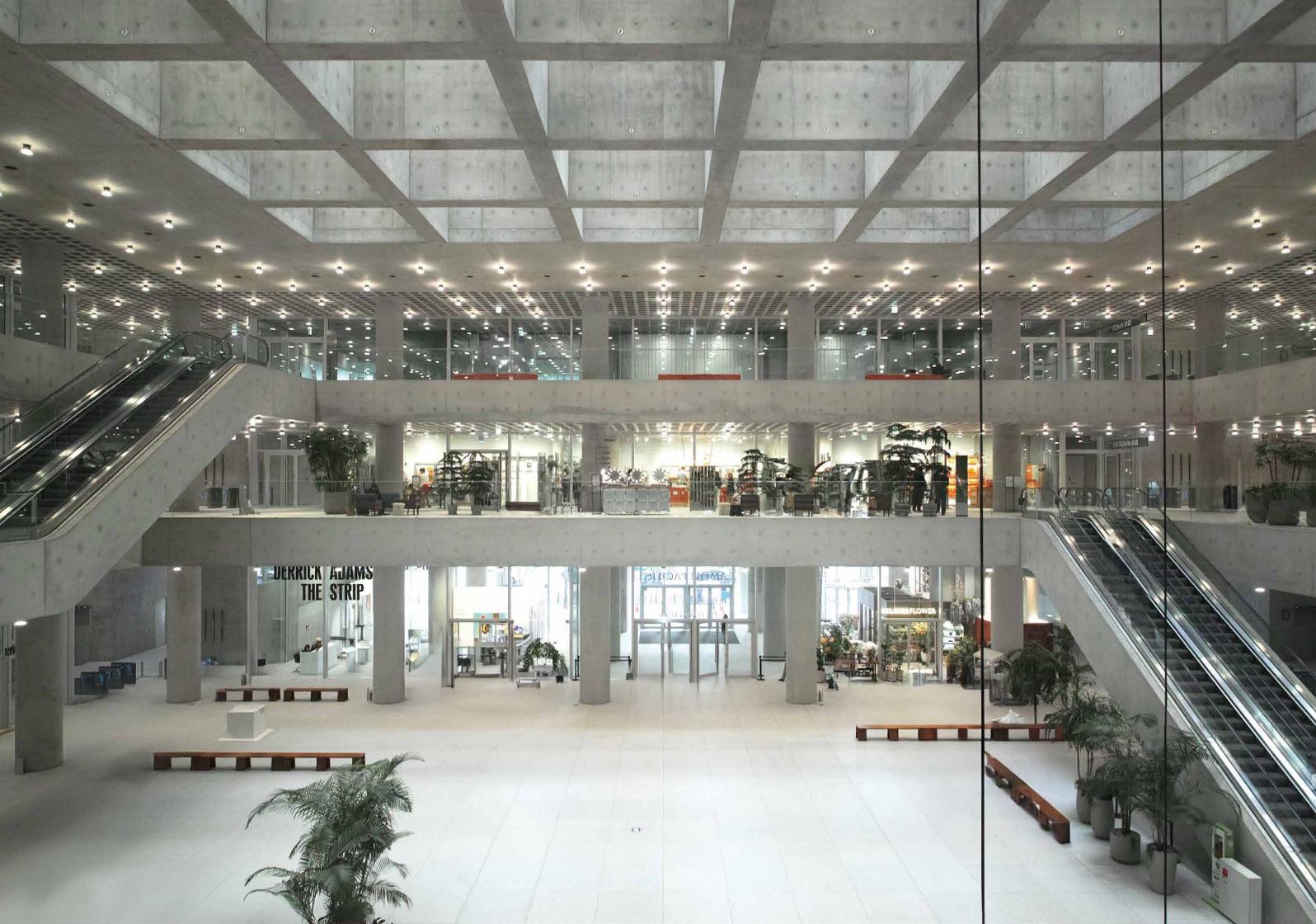
Location : Soul Korea

Projerct area : 14525.62 m²

Site area :14525.62 m²

Floor area : 216,000 m²





Interior



Exterior



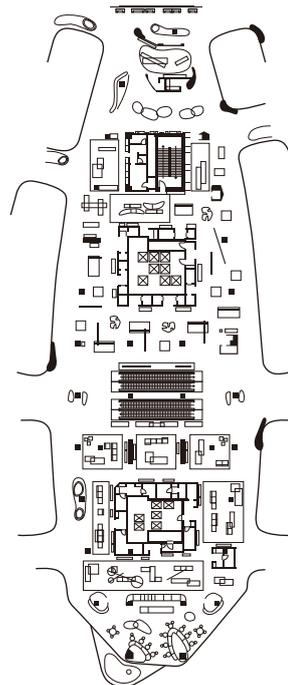
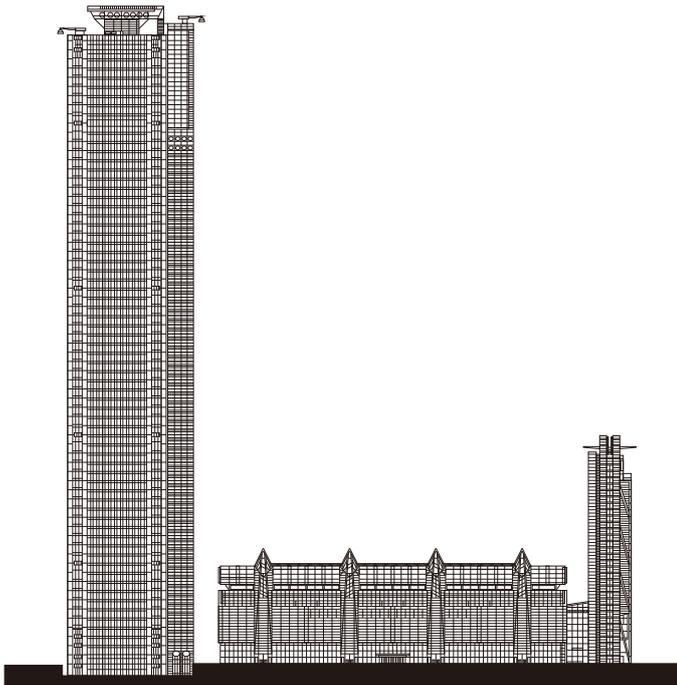


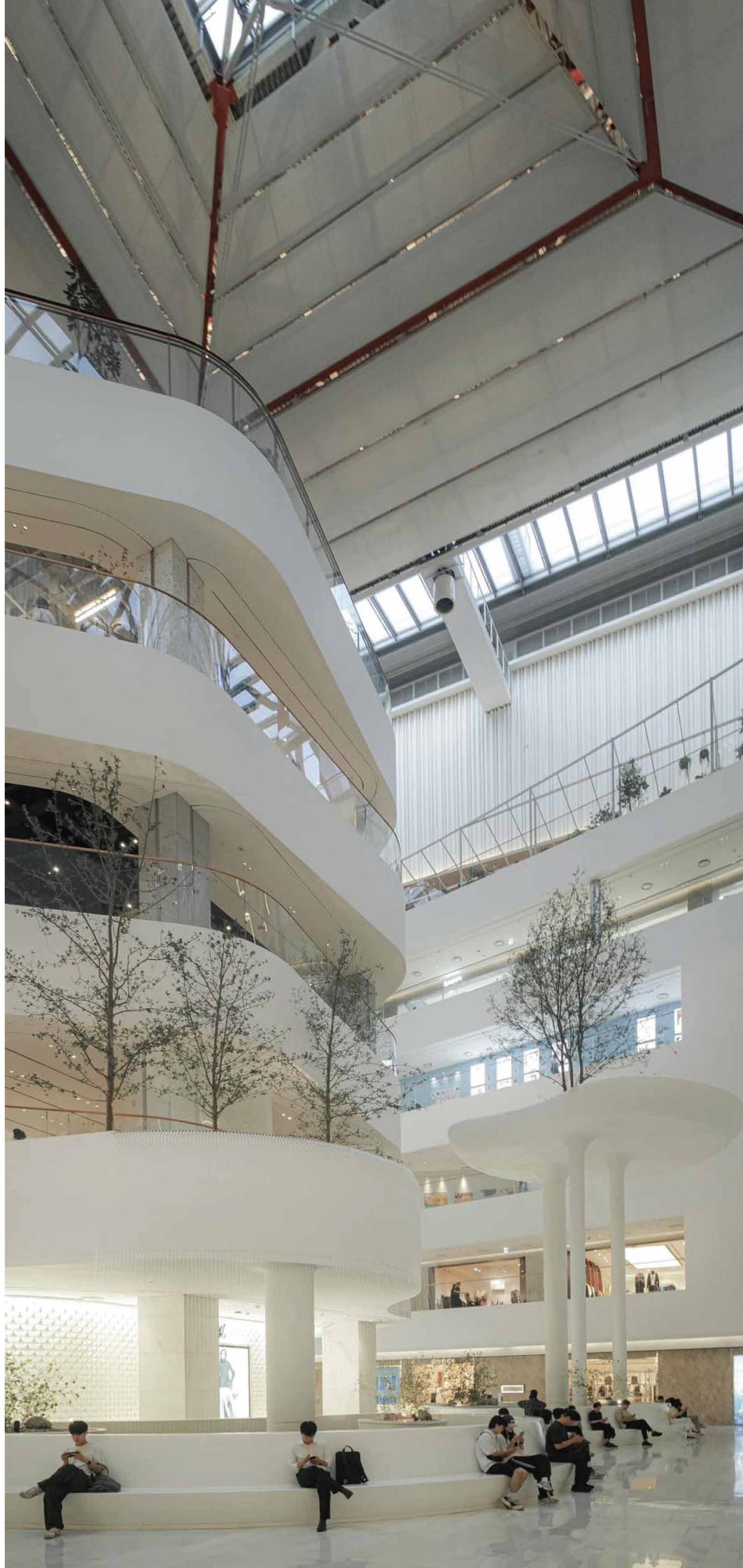
DAY1

The Hyundai Seoul

Richard Rodgers
2021

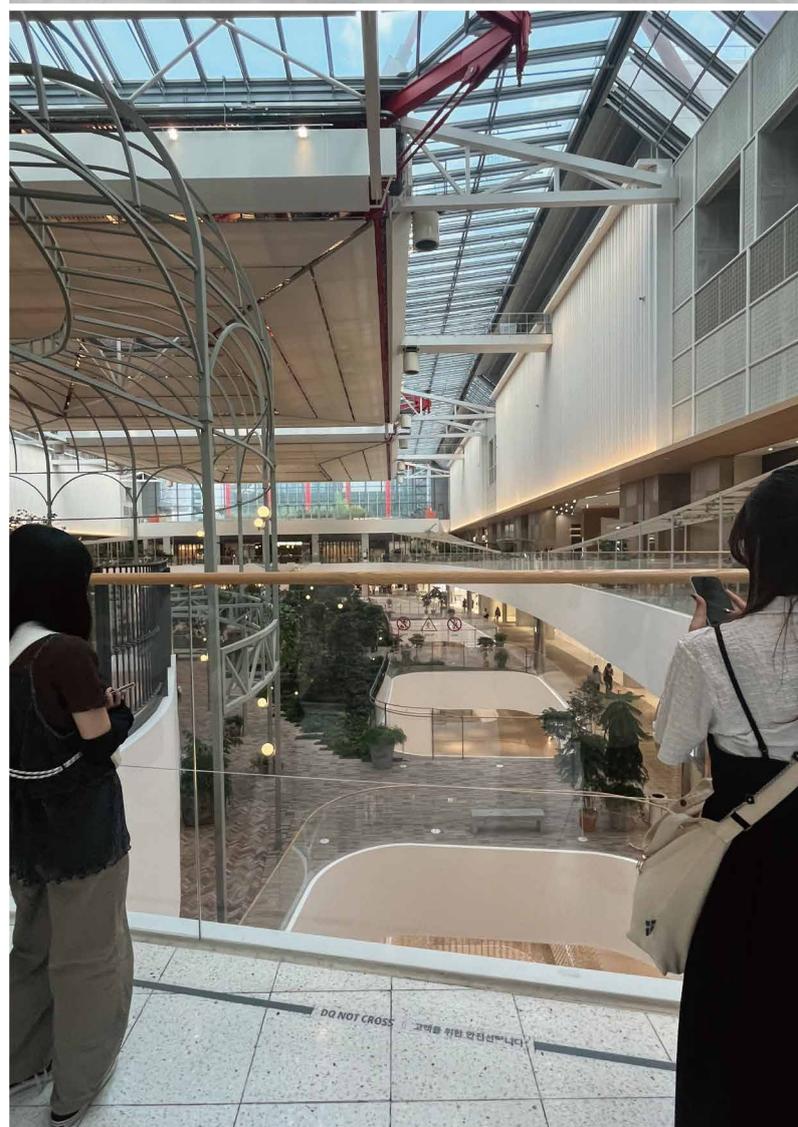
Location : Seoul Korea
Floor area : 193,854 m²





Interior



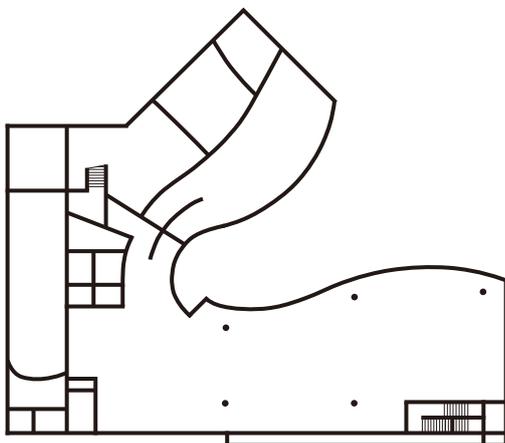
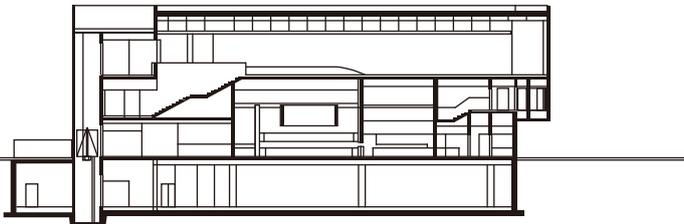


DAY2

Mimesis Art Museum

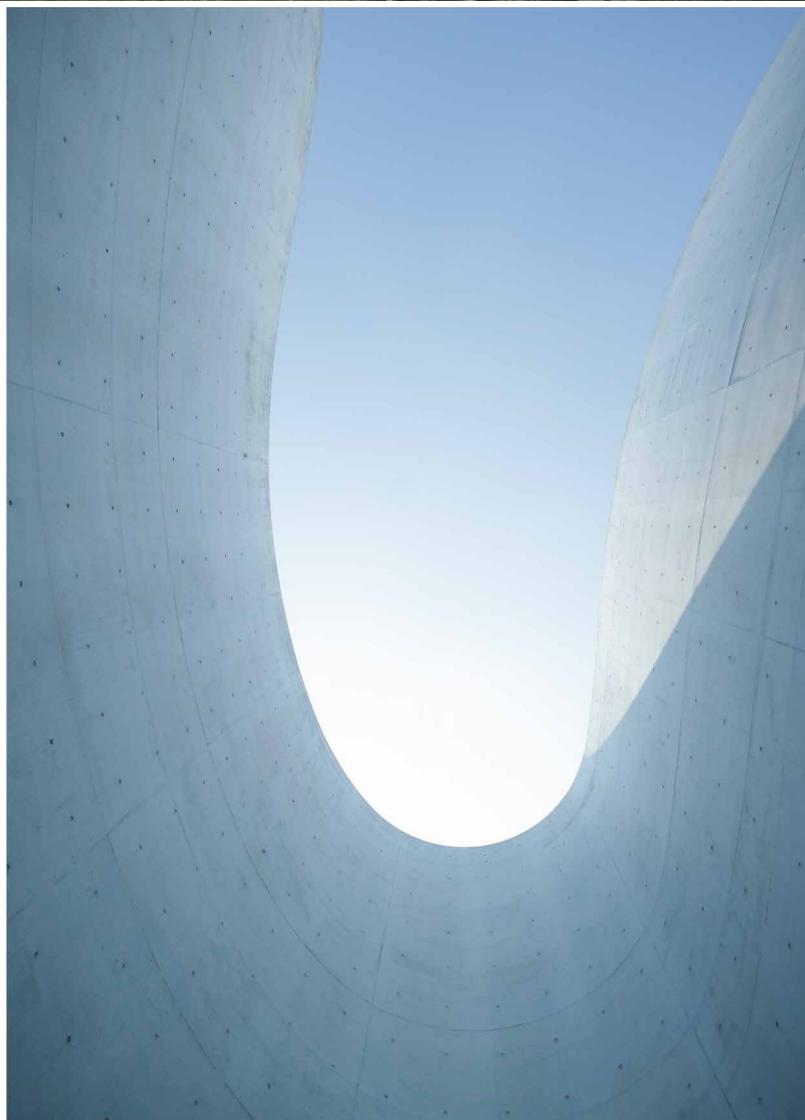
Álvaro Siza, Carlos Castanheira
2010

Location : Soul Korea
Total area : 4,650 m²
Building area : 1,300 m²
Floor area : 4,000 m²





Exterior



Exterior



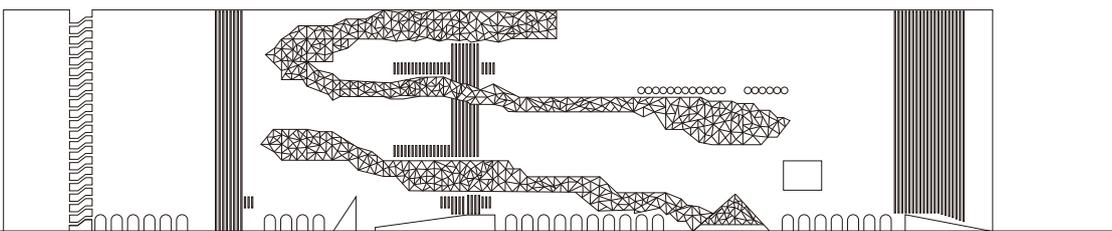
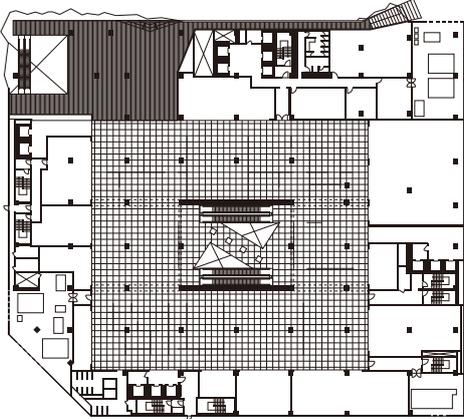


DAY2

Galleria In Gwanggyo

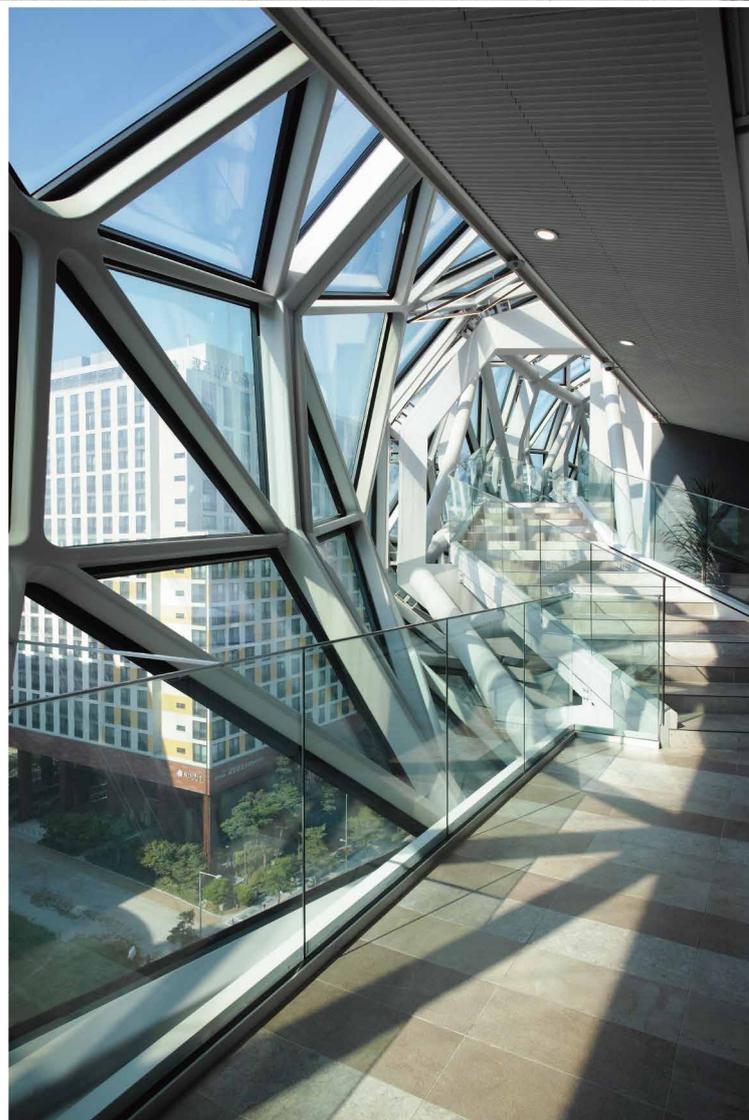
OMA(Chris van Duijn)
2020

Location : Soul Korea
Floor area : 137,714 m²



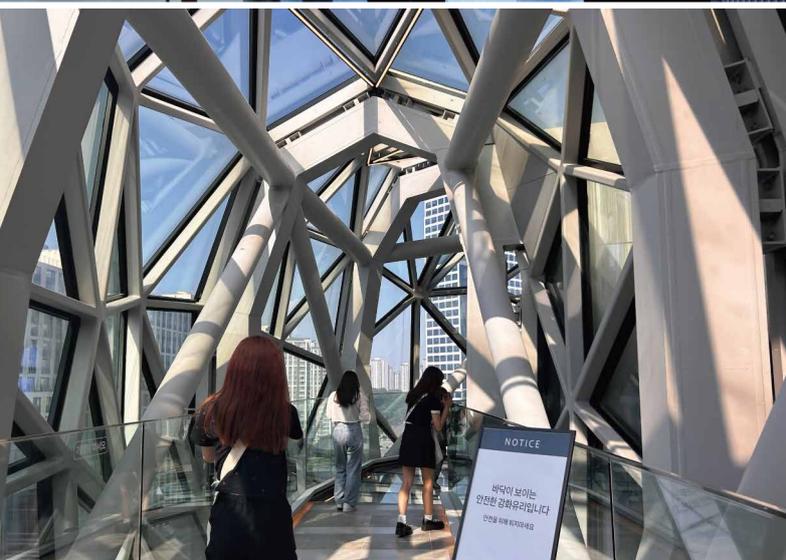


Exterior



Interior





DAY3

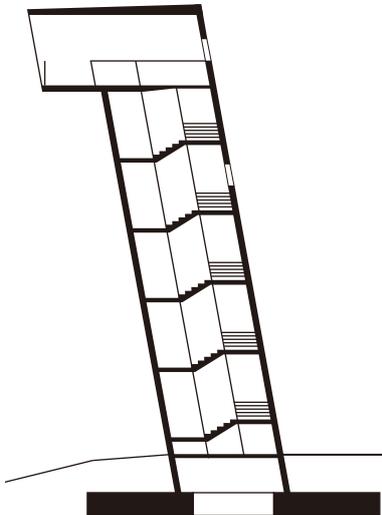
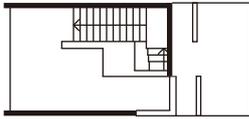
Saya Park, Miradouro Sodae(Observatory)

Álvaro Siza, Carlos Castanheira
2018

Location : Sayuwon, Gyeongsangbuk-do, Korea

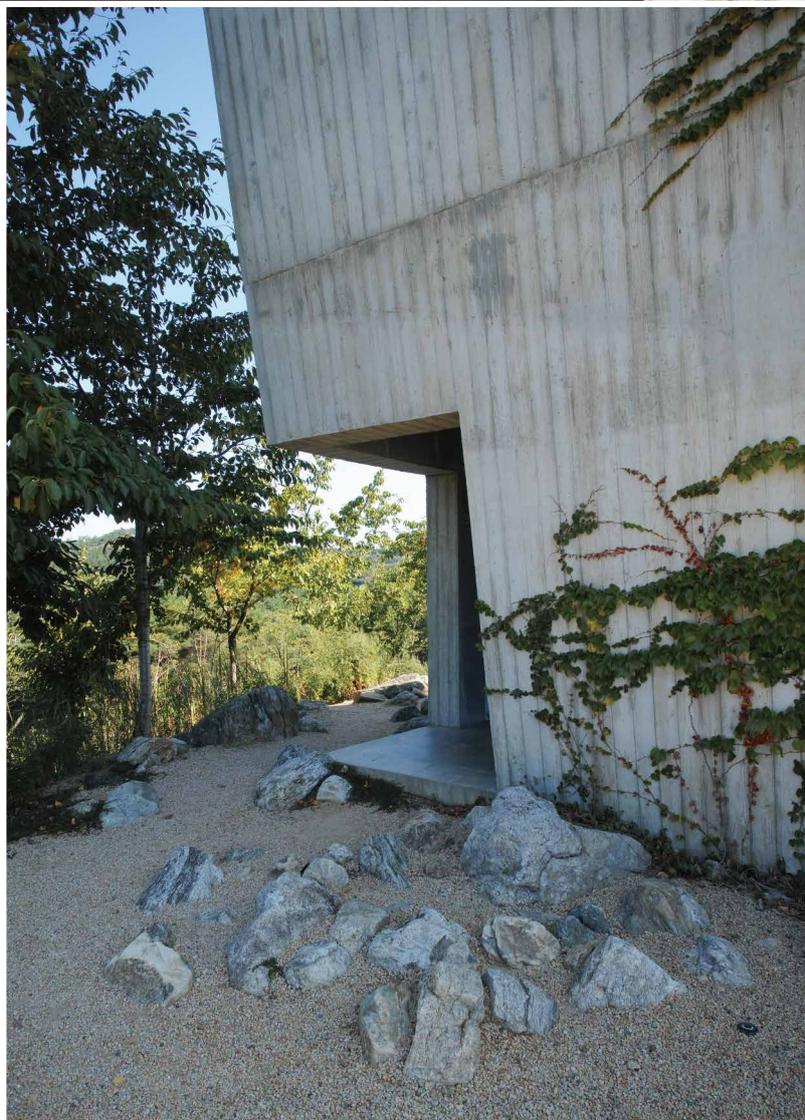
Project area : 308,000 m²

Floor area : 200 m²





Interior



Exterior





DAY3

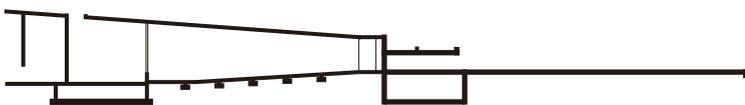
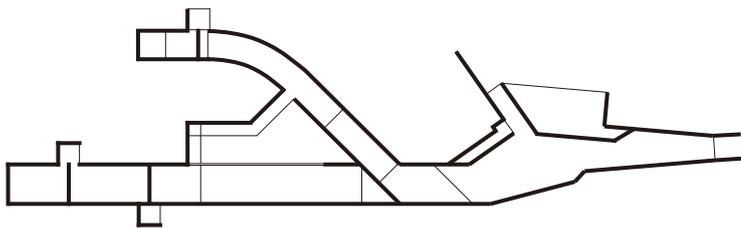
Saya Park, Art Pavilion

Álvaro Siza, Carlos Castanheira
2018

Location : Sayuwon, Gyeongsangbuk-do, Korea

Project area : 308,000 m²

Floor area : 1,350 m²

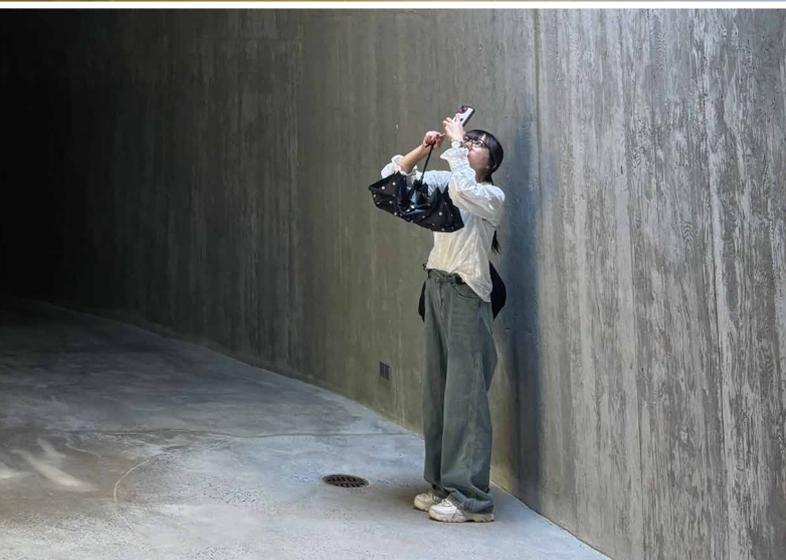




Exterior



Interior



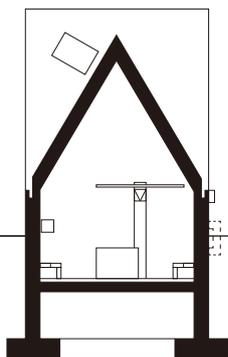
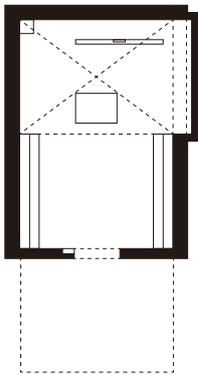


DAY3

Saya Park, Naesim Nakwon

Álvaro Siza, Carlos Castanheira
2018

Location : Sayuwon, Gyeongsangbuk-do, Korea
Project area : 308,000 m²

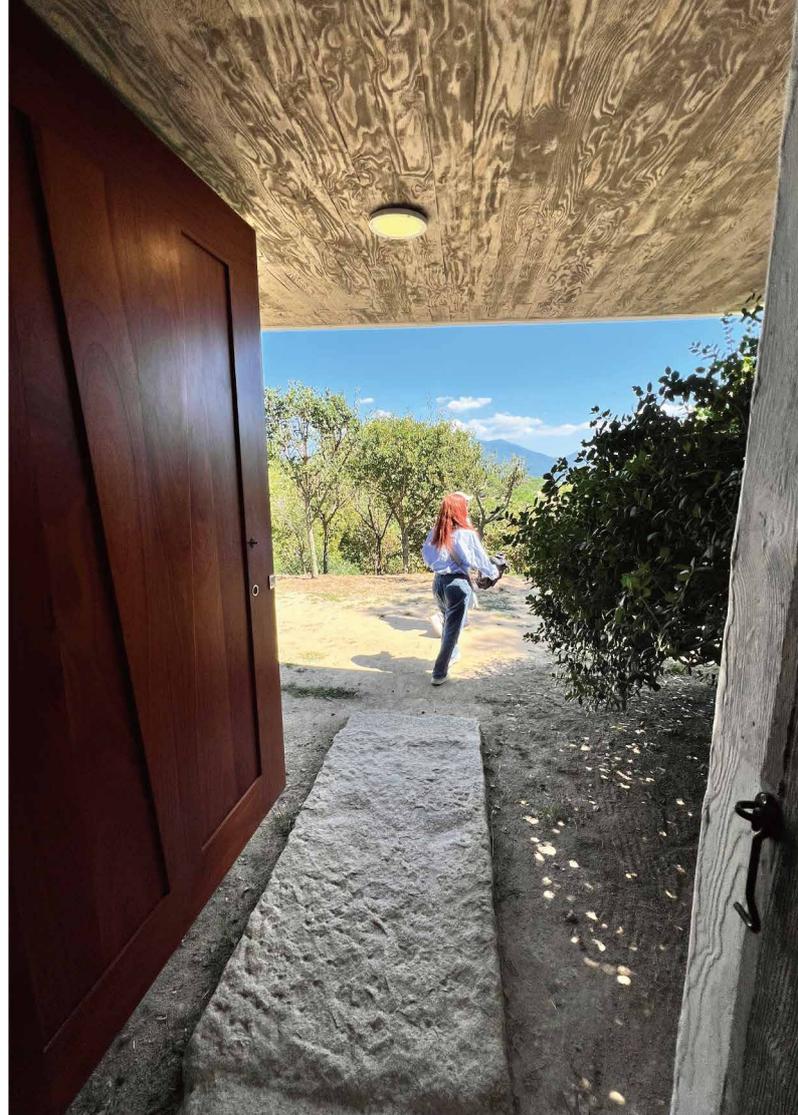


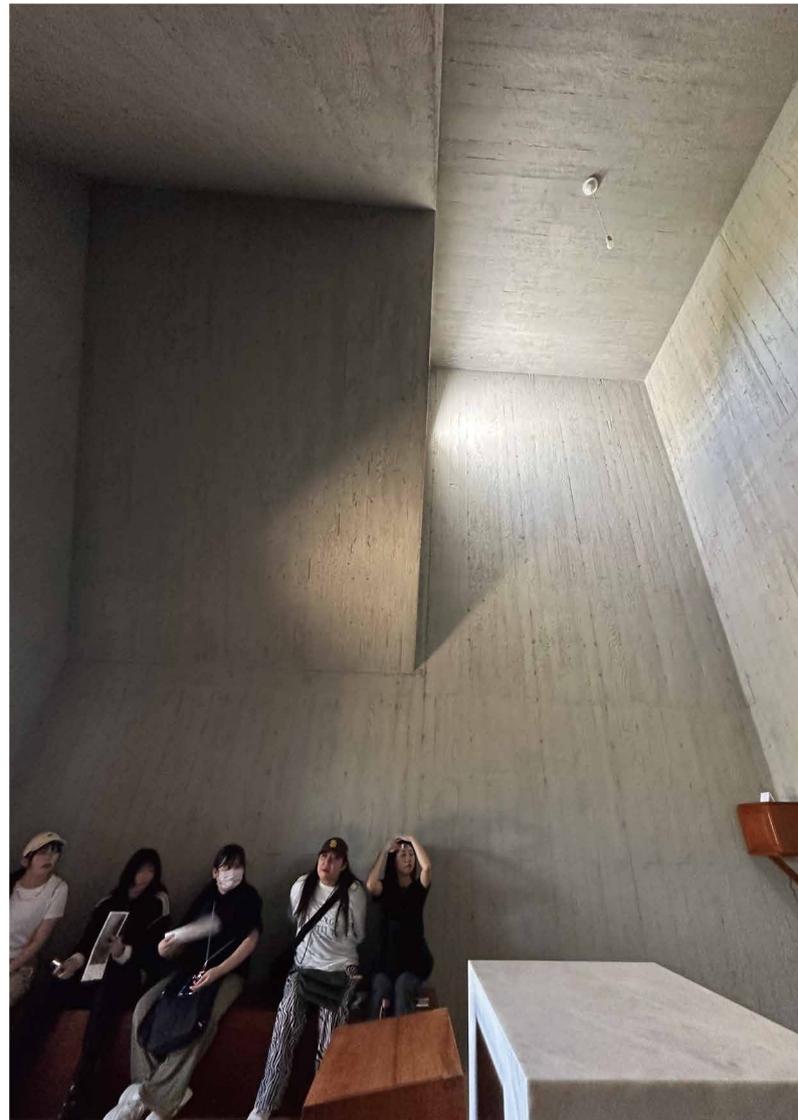


Exterior



Interior





DAY4

Dongdaemun Design Plaza

Zaha Hadid
2014

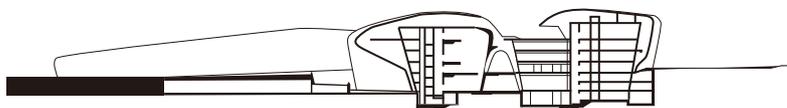
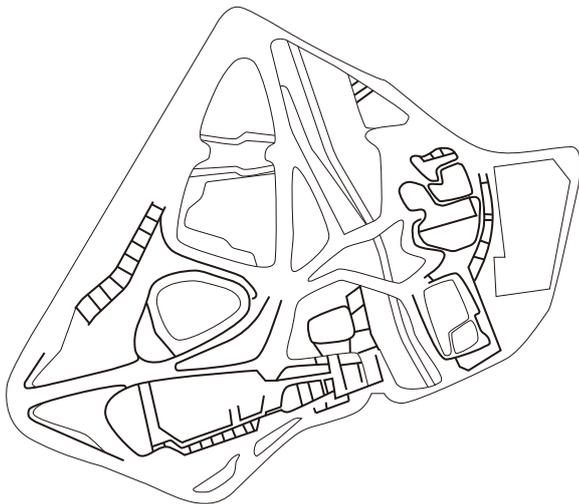
Location : Seoul Korea

Project area : 65,000 m²

Site area : 65,000 m²

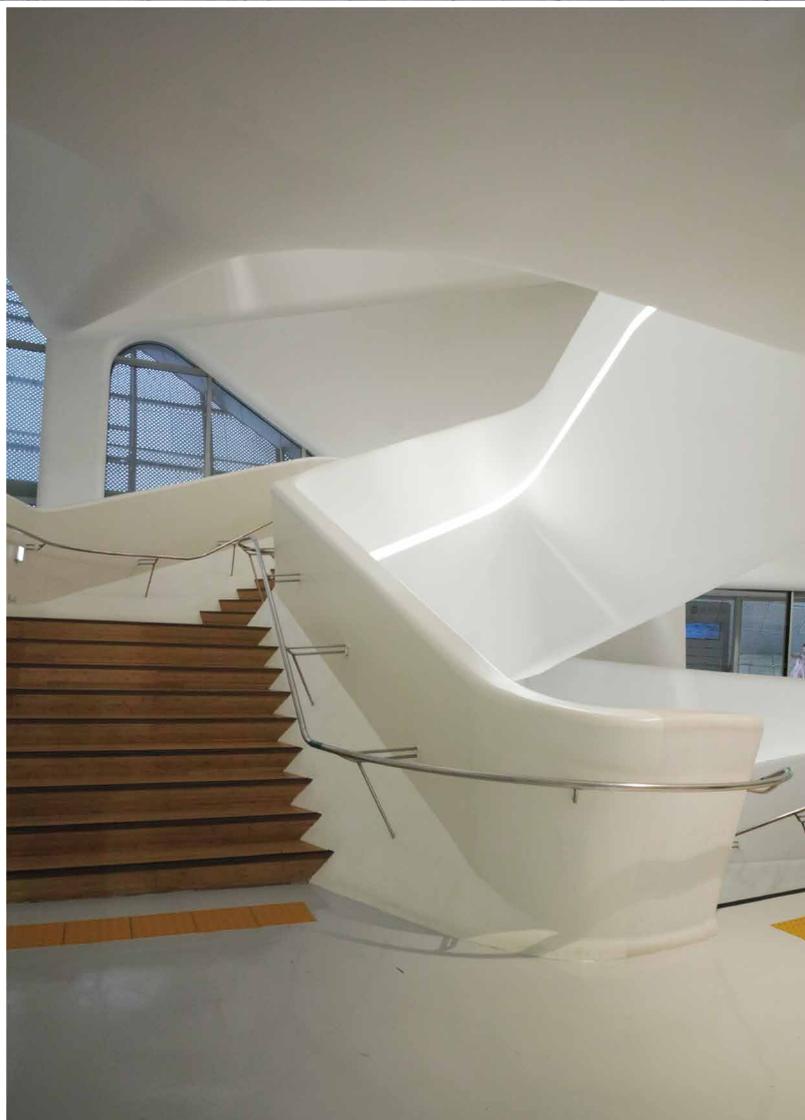
Floor area : 85,320 m²

Park area : 30,000 m²



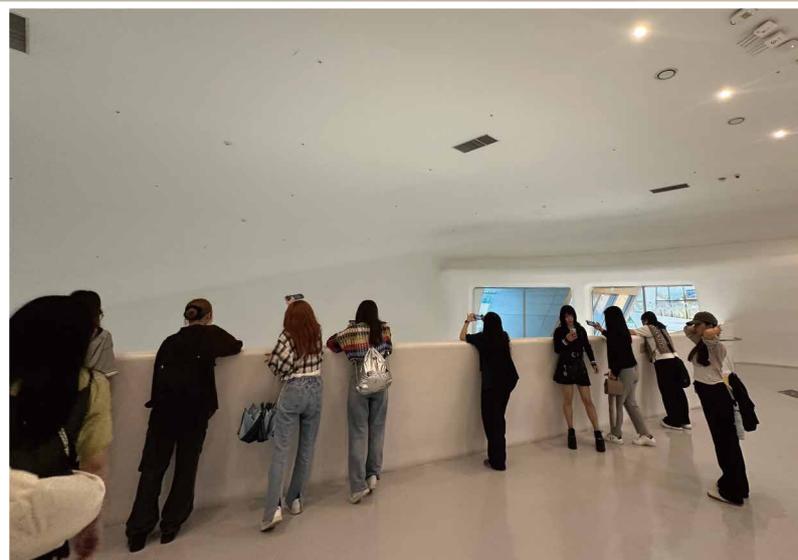


Exterior



Interior



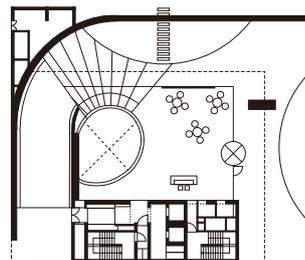
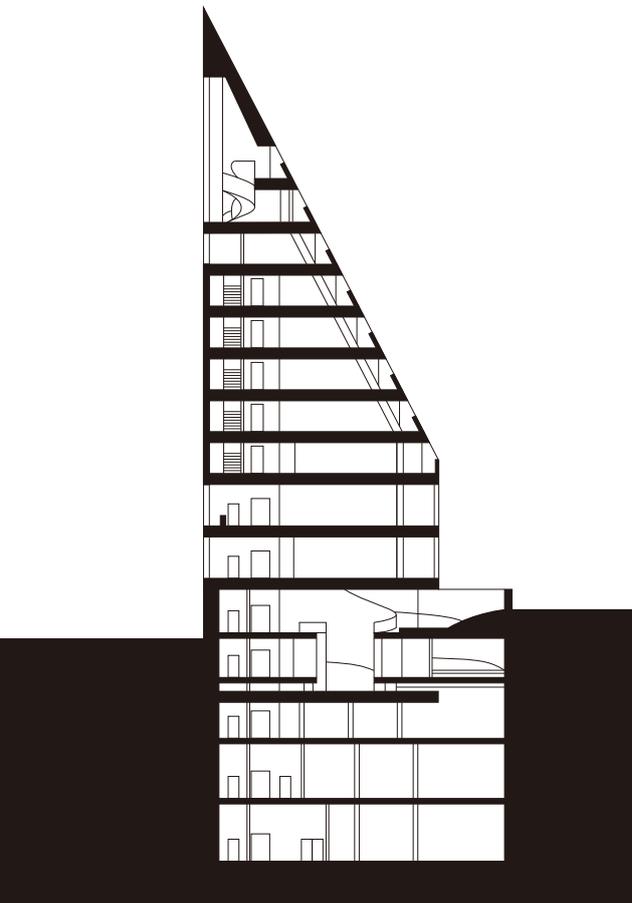


DAY4

ST International HQ and SONGEUN Art Space

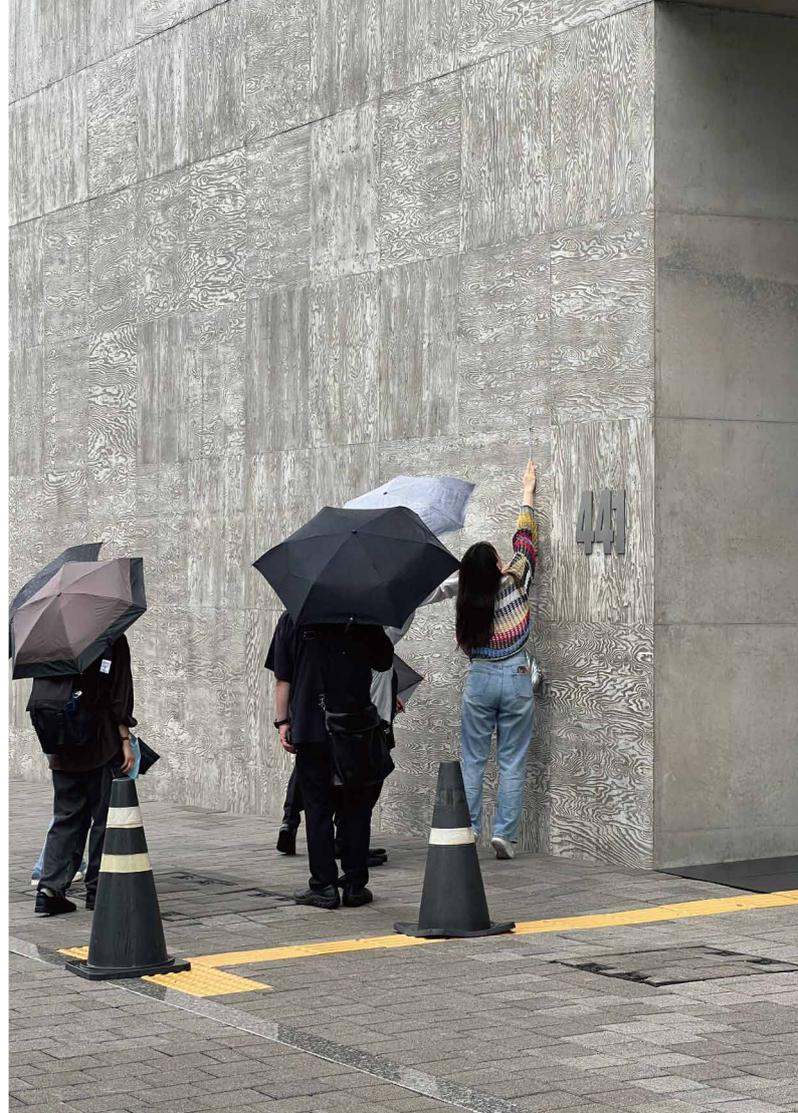
Herzog & de Meuron
2021

Location : Seoul Korea
Project area : 642 m²
Site area : 1,179 m²
Floor area : 8,167 m²





Exterior





アモーレパシフィック新社屋 (Amorepacific headquarters)
chipperfield

中村 優花



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

周辺環境として人通りが多く、車通りも多い。そのため、他にも高いビルが周りに存在している環境である。しかし、ガラスが外壁な建物は多くあるが、アモーレパシフィック社屋では内部の空間の見え閉じているような建築物である。一階は内部が少し見えるようになっていたため、人の入る動線を意図した関係性になっていると感じた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

周辺環境からあったように、周辺には高いビルが多々存在している中、真四角な建築物が見えてくる。外壁はガラスで構成されており、日光の反射を強く感じるビルが多くある中、アモーレパシフィック社屋はブリーズソレイユによって比較的反射感がなく、マットな印象を初めに持った。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

遠くから見た時、真四角で下に向かっていく重力を感じるが、近くまで向かって行くほどに真下に向かった重力感の印象よりも上に向かって見上げて見た時、まるで建物の上の方の角がこっちに倒れてきそうな印象を感じ、少し上をみるのが怖いような心の動きが私の中であった。

F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離ではブリーズソレイユによってランダムな配置であることや、真四角ではなく、2階と3階で少し、大きさに違いがあることがわかっていく。近づくほど中心の穴の空いたような中には空間に視界が引き込まれるような印象を持った。また、真ん中の中庭は自然光が入っていると言うより、影になっているため、色彩的にも目を惹きつけやすいと感じた。

F5. 内部と外部の関係性

外部からでは内部の空間を見ることは遠くからはできず、近づくことによって一回を通して内部の空間が少し見えてくる。内部からは外部からの視界は気にならないが、2階から3階は外壁の壁も見えなかったため、よりその印象を持った。内部は閉じているようで横に開いているような不思議な体験をしたと感じた。

F6. シークエンスの展開

外部から見て全体的に閉じているような印象を与える分、内部に入った瞬間の横の広がり方が強く感じる空間であった。また天井の自然光が入るための天窓は窓の隙間だけではなく、水までも通った淡い光の道が横の空間の開きほど強くはないが、緩やかな縦への空間の光も感じるシークエンスの展開となっていた。

F7. デティールが心に与える印象

2階から3階でのガラスの壁は繋ぎ目がとても少なく、12ミリのガラスを三枚で構成されていた。よって線が少ない綺麗な印象を感じさせ、ガラスで自立をしていた。壁だけではなくエスカレーターまでもが同じように線の少ない暑いガラスで形成されているため、視覚的に邪魔ではない、クリアな見え方を意図されていると感じた。

F8. 建築に使っている素材について

建築全体はコンクリートを利用されており、外壁はガラスが使われていた。外部には2階から上に向かってルーバーが使用されており、外部から内部を見せないブリーズソレイユになっていた。内部のガラスの壁は一枚ではなく、三枚に重なってガラスだけで自立するようになっていた。

F9. 建築見学をしての感想

アモーレパシフィック社屋を見学して一番印象に残ったのは外部と内部の空間の関係性である。内部は外部をみることができ、外部から内部には閉じているが一階の空間によって繋がりがあがる。そこから、設計趣旨との関連しているのだと感じた。また、初めて重力への対抗をしている建築を強く認識ができた。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

私はアモーレパシフィック社屋に入った瞬間、心の動きが強く感じた。1階から3階が一つの大きな空間に存在しているが、一階と2階3階で空間の印象が違おうと感じた。一回で横へ開く感覚を持ちつつ、2階に上がると知的な空間となるまた違った印象を持った。また、説明の中で一回は空中に浮いているように見えるという内容があったことで初めて気付いた時、一気に見え方が変わってさらに広がり不思議な空間を感じた。

ミメシスアートミュージアム (Mimesis Art Museum)
Álvaro Siza

中村 優花



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

周辺環境として車道は多いが、車通りが少なく、人通りもすくないため、静かな環境であった。駐車場や従業員用の入り口のエリア側の美術館の外壁は開口部がなく、比較的閉じた空間となっていた。また、利用者の動線方向には大きく開いており、見せ方がメリハリがしっかりしている関係性となっていると感じた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くからミメシスアートミュージアムを確認したとき、初めに曲線と曲線の間にある空間に引き込まれるような空間が視界に入った。また、建物の外壁にへこんでいる箇所があったことで建物自体が浮いているように思わせる印象が強く残った。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

中心の空間に向かって歩いていくとき、最初に感じていた印象とは違っていた。はじめは引き込まれるような空間の印象があった。しかし、内部に入っていくごとに両方の外壁からの圧迫感を感じた。また、内部の開口部が見えるが、明るさを感じにくく開く印象を感じる事がなかった。

F4. 至近距離で何を感じるか

間の空間を一番奥まで歩いた時、近づく際の動的変化に伴う心の動きであったように、見渡す限り暗く閉じた圧迫感を感じる印象であった。しかし、上を見上げることで今まで感じていた圧迫感をなくすように空が見えてくる。よって、空間の開きを感じた。

F5. 内部と外部の関係性

内部も外部も全体的に浮遊感を感じることができるという共通の関係性を持っている。また、内部は利用者が来たときに見る方向に開口部が開いており、駐車場では開口部がほとんどなかったため、見せる空間を重要視とする関係性があると感じた。

F6. シークエンスの展開

美術館の展示のエリアでは自然光による間接照明が多くあり、天井がまるで空中に浮いているような設計になっていた。そのため、重力に対応した空間となっており、光の明暗の差がそれぞれの天井、壁に感じる事ができるシークエンスの展開となっていた。

F7. ディテールが心に与える印象

展示のエリアでは全体的に自然光を間接照明となっている天井になっていた。しかし、階段や天井窓による直接的な光が入っている箇所ではすべて隠されていないが、少しだけ壁が当たって光が屈折されている箇所があった。そのため、美術館全体が光を見せる空間であるという印象を与えられる。

F8. 建築に使っている素材について

全体的にはコンクリートが使用されており、天井含めて内部の壁には白が基調とされていた。それは光を反射させ、屈折させるために白を基調としていると考えた。また、白であるため、影の明暗も感じさせやすくしている要素であると感じた。

F9. 建築見学をしての感想

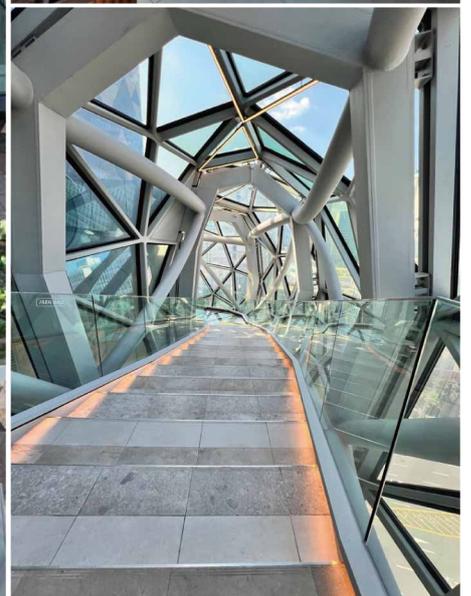
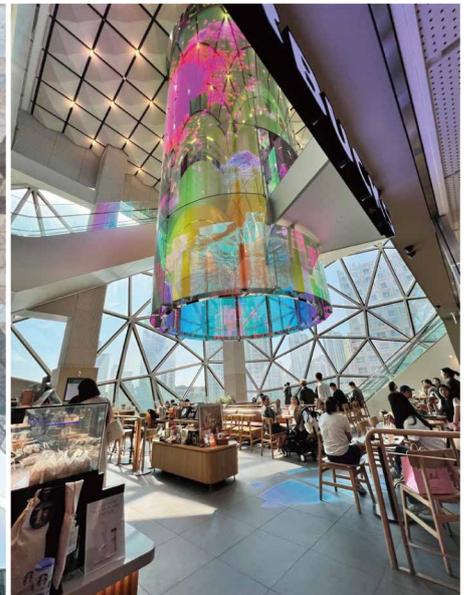
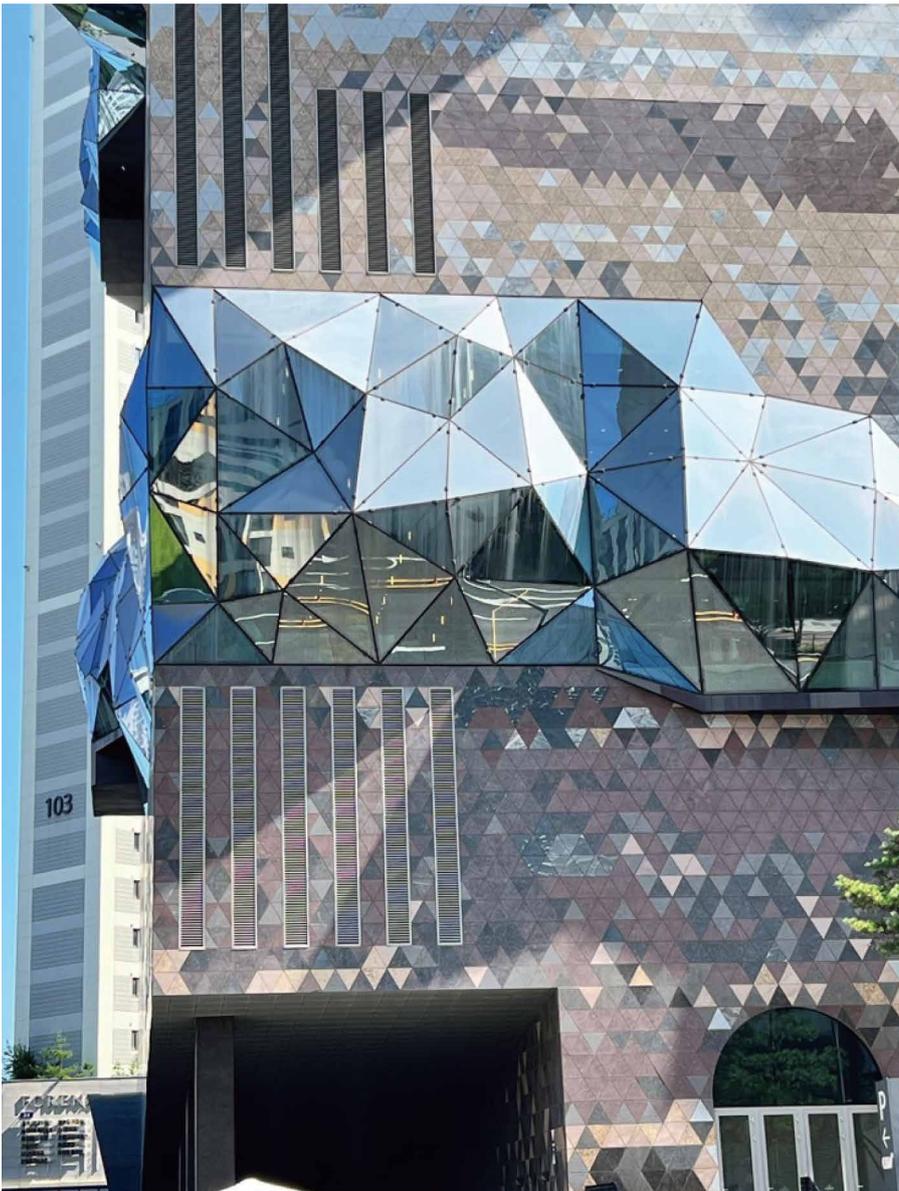
今回、ミメシスアートミュージアムを見学して、建築自体の浮遊感をとても強く感じた建築物であると感じた。内部の天井にあった浮遊感に加え、光による明暗の感覚が面白いと感じた。また、光だけでなく天井の高さによって空間の見せ方を学ぶことができた。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

私は外部の曲線上の壁の間の空間に進んだ瞬間、一番心が動いたと感じた。はじめはへこんでいる空間であり、美術館の入り口に向かう道ではない動線状に存在していた。しかし、入り口に向かう方向ではないその間の空間に進むと圧迫感を感じ、空の視界の晴れる感覚がとても印象に残った。

ギャラリー百貨店光教店 (Galleria In Gwanggyo)
OMA

中村 優花



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

周辺環境は人通りがとて多く、車通りもとても多い。ほかのビルが多くある中、四角い立方体の建物が存在している。車の音や人の視線が気になるような環境であったが、建築全体に開口部は少なく、唯一の何幾何学的な形のガラスの箇所は開口部は内部が完全に見えないため、内部と外部の関係性を断つような関係性になっていると感じた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

初めに建築が見えてきたとき、明らかにほかの建物とは違った印象を与える建築物であると感じた。地面にある地層がそのまま持ち上げられたような外見の建築物となっており、浮遊感のある建築であったような重力との反発ではなく、持ち上げられる力強い印象を受ける。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づいていくことによって地層のように見えていた外見もすべて三角の形で形成されていることに気づいた。入り口に近づくと正方形で形成されている建築の角に突然切られたような空間になっている。入り口の空間だけが違った空間の印象を持たせ、ミラーのようにになっていたため様々な方向の反射する空間となっていた。

F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離で見たとき、ガラスの何幾何学的な空間は外観から見た時と違う印象を持った要素があった。外部で見たとき、何幾何学的なガラスの塊が立方体に巻き付くような形をしていた。しかし、内部から見たときには立方体とは少し離れた距離に設置されているように巻き付いているものというより空間の枠を破るような空間を形成していると感じた。

F5. 内部と外部の関係性

内部と外部の関係性は見せる箇所の関係性を強く持っていると感じた。外部に対して内部ははっきりと見えるような開口部はなく、薄く内部が見えても反射を強く感じる開口部が多い。しかし、内部から外部に対して周辺環境を見渡すことができるほどの外部が確認できる。そのため、内部は閉じて利用者の購入時のプライベートや視線から守りつつ外部を見渡せる解放感を与える関係性を持っていた。

F6. シークエンスの展開

シークエンスの展開は一階のエスカレーターを上るまでの立方体による四角い枠にまとまっている空間ではなく、何幾何学的な空間によってその枠さえも破ってしまうような外に向かって横に開く空間を同時に天井の高さによって全体的な伸びを感じさせるシークエンスの展開となっていると感じた。

F7. デティールが心に与える印象

建築物事態の地層のような模様も三角で形成されており、色相を変化させることによって地層に見せている。また、何幾何学的な筒のような空間であった。その空間は三角を集めたような空間に制作されている。また、外壁も三角のタイルを使用されていることから、細くなった空間のディティールが印象に残った。

F8. 建築に使っている素材について

何幾何学的なガラスの空間にはガラスの内側には鉄骨があった。鉄骨はまっすぐではなく、開くように曲線になっていた。よって筒のようにガラスに囲まれた空間であっても開きを感じた。さらに、外側のガラスの柵の壁は斜めになっていて安定感を感じさせにくいと感じていたが、上に鉄の固定部品がついておりガラス自体もしっかりと自立していた。

F9. 建築見学をしての感想

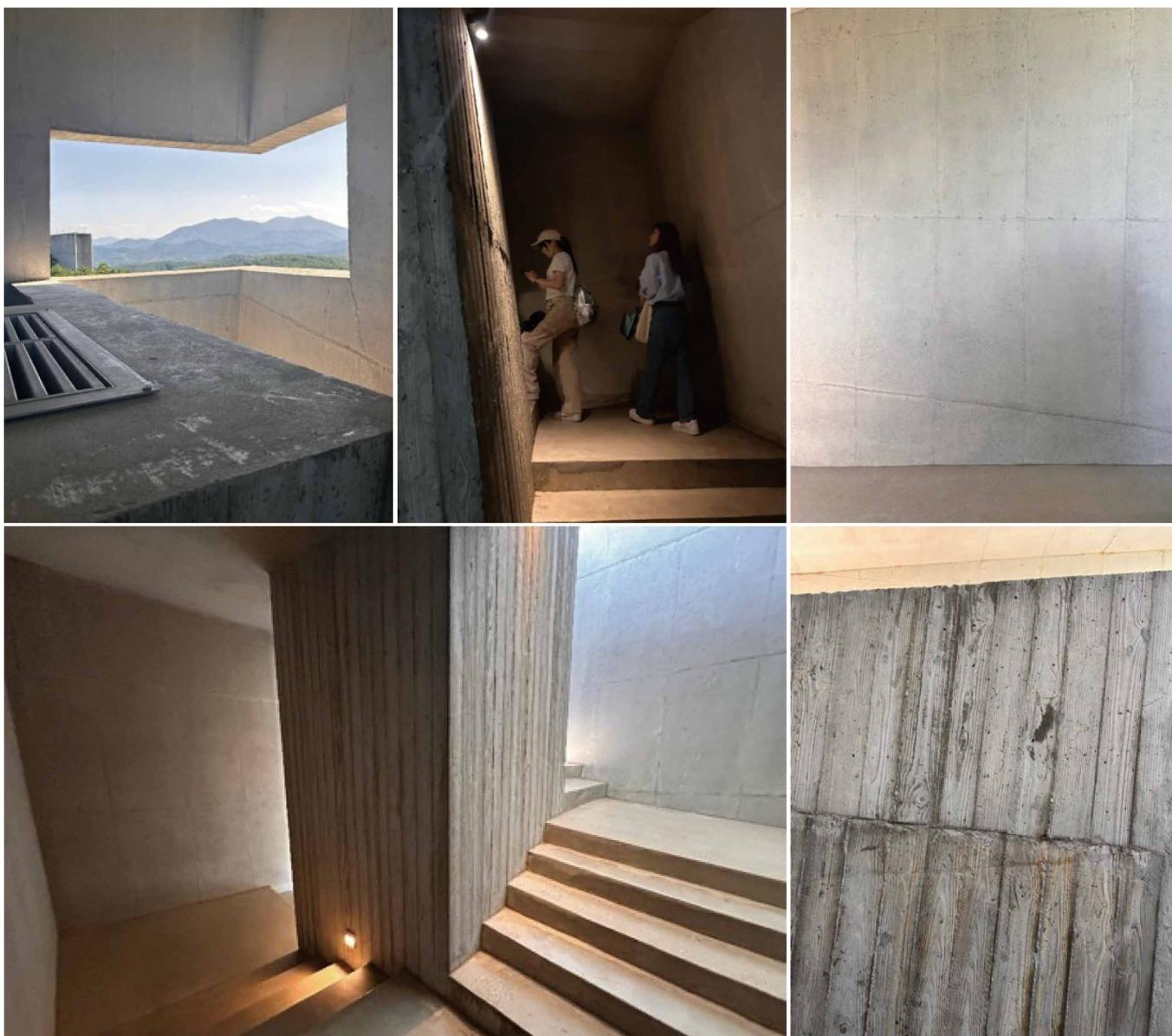
Galleria In Gwanggyo を見学して印象に残ったのは、外部から見てガラスがあるにもかかわらず内部を見せない閉じた空間になっている。しかし、内部からは強く外部を感じる空間となっていた。そのため、地面が持ち上げられた地層のように見せているため、コンセプトに合わせているのだと考察ができた。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

心が動いた瞬間は内部に入って一階から二階に向かってエスカレーターで上がっていく場面であった。外部から見たとき立方体で形成されている印象を持たせていた。しかし、内部のエスカレーターに乗った瞬間、立方体による四角い枠のような印象を持つことはなく、ガラスの箇所によって四角い枠を壊すような空間の広がり形成していた。

思惟園展望台 (Saya Park/SAYUWON, Miradouro Sodae)
Álvaro Siza and Carlos Castanheira

亀山 月菜



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

外壁のコンクリートには木目が付いていた上、周囲にあった葉おつたが壁に広がっており、自然をよく感じさせ、一体化しているように感じた。また、丘の上に建っていたため、丘の下から見た時に建築物が斜めに建っていることがよく分かるようになっていた。また、建築物自体の存在感も出していた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見た時に建築物が斜めに建っていることが分かり、重力に建築物があらがっているように感じた。また、丘の下から見ていたので余計に高さを感じ、それと同時に存在感を感じた。高さが高いのに細く、地面に対して斜めに建っていることが不思議に感じた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

遠くから見ると、地面に対して斜めに建っていることがよく分かり、重力にあらがっているように感じた。また、遠くからでは周りの木々よりも圧倒的に建築物が高にのでめだっていたが、近づくとも自然との一体感を感じ、自然の中から生えてきた建築物みたいだと思った。

F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離で見ると、高さから圧迫感を感じるかと思っていたが、思っていたよりも圧迫感は無かった。そして、コンクリートの壁に広がっているつたや、コンクリートに付いた木目から自然との繋がりや一体感を大いに感じた。

F5. 内部と外部の関係性

開口部が所々に開いており、そこからは風や景色が一気に見え、外との繋がりを感じた。しかし、開口部がない空間もあった。その空間から、開口部のある明るい空間に進むことで、自然と二つの空間を比較し、開口部のある空間が余計に外部と繋がっているように感じさせる。

F6. シークエンスの展開

内部に入ってから、天井までの高さが低く幅も狭く光が入らず洞窟のような暗さがあった。そこでは、人の話し声や足音が響き、風も通っていたので冷たさと恐怖心が芽生えた。また、暗いせいか自分の平衡感覚が狂う感覚が強くなった。その後の開口部では明るい景色が見え、開放感があった。その流れを繰り返し、一番上に登った際は、もっと風が通り、心地よかった。そこまであった怖さが一気に無くなり、景色に取り込まれるような感覚になった。

F7. デティールが心に与える印象

壁のコンクリートの線が床に対して斜めになっており、歩いていなくとも建築物が斜めになっていることがわかるようになり、重力を常に意識させるようになっていた。また、階段の中心部の壁は木目が付いており、常に自然を感じさせていた。

F8. 建築に使っている素材について

主にコンクリートが使われており、階段の中心部の壁と階段の外側の壁では模様が異なっており、差別化されていた。階段の中心部の方の壁は木目が付いており、反対側には模様が一切無かった。コンクリートの打ちっばなしであったが、木コンの跡も無くつるつるとした表面であった。

F9. 建築見学をしての感想

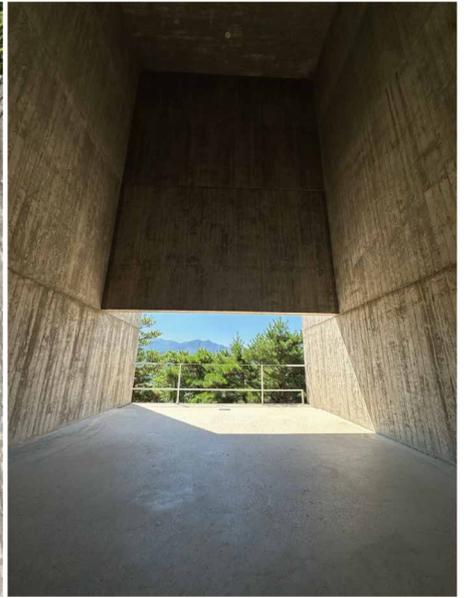
この展望台が一番自分の心が動かされたのでとても記憶に残る建築物であった。今まで心が建築物で動かされる感覚がわからなかったが、心の変化を感じながら見る感覚が理解できて良かった。ただ登るだけなのに、こんなにも感情が変わるとは思わなくてこれから先もずっと心に残る建築物に出会えたので良かった。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

最後登り切る瞬間である。登り切るまでは、恐怖心や平衡感覚の狂いを感じていたのに、上の光が見えてき始めたところから、この先にはどのようなものがあるのかという期待が高まり、景色を見た瞬間に、景色に釘付けで今まであった恐怖心を忘れてしまった。

思惟園美術館 (Saya Park/SAYUWON, Soyoheon Art Pavilion)
Álvaro Siza and Carlos Castanheira

山本 梨乃



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

アートパビリオンは展望台と同じく、慶尚北道の山中にある「Saya Park」というアート施設内に建てられており、自然に囲まれた美術館である。一般的な美術館と異なり、風を感じながら鳥の鳴き声や自然の香りと共に作品を楽しみつつ、建築自体が一種の作品となりさまざまな景色を見せてくれる場である。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

展望台からアートパビリオンへ向かう道から見るとコンクリート造の建物が奥に伸びていることがわかる。ほとんどが木に隠れて見えない中、先端が飛び出して浮いているのがよく見えたが特に何も感じず、先端を先に見せ、反対側まで歩かせるのはなぜか気になった。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

突如建物が現れるというアプローチではなく、山道の延長線上にコンクリートの壁と床が現れ自然と建物に入っていくという感じであり、高い壁に挟まれた道では青空が見え開放的だと感じた。しかしアートパビリオン内への入り口は天井が低く、圧迫感と先はどうなっているのかというドキドキ感があつた。

F4. 至近距離で何を感じるか

大空間の足元に設けられた長方形の開口部であつたため、低い位置から見えるものは限られているように思つたけれど、傾斜によって視線が下がることで空まで見えたり、実際の窓の高さは中庭を挟んで反対側にある通路の屋根と同じ高さであつたりという発見が面白かつた。

F5. 内部と外部の関係性

廊下のような空間に開けられた開口は小さなもので広い範囲に光が届くように一部の天井と壁を取り除くような形にしたのではないかと考えた。その他の開口部は人の動きで見える景色が変化するものが多く、また別の空間に移動するたびに一度外に出させるような順路にしている。

F6. シークエンスの展開

天井が低く暗い入り口を抜けると、静かで天井が高く暗い空間が訪れ、空間が一気に広がる感覚と静けさに圧倒された。床が傾斜になって少しずつ下がっているため、下に設けられた窓から見えるものが少しずつ空に近い景色へと変化したり、吊るされた鉄製の作品が姿を現したりと、進むことでだんだんと見えてくる視覚の変化が面白かつた。

F7. デティールが心に与える印象

どの空間にも屋根があるにも関わらず鉄鋼の作品が置いてある空間の出入り口上部に庇がかかっていたり、曲がり角の一部がくり抜かれていたりしていた。庇はなぜ作られたのか不思議に思っていたが、角の一部がないことはそうすることによって壁を見ていると奥から光が漏れて行先を示しているように感じた。

F8. 建築に使っている素材について

展望台と同じくコンクリートが用いられ、杉の板でできた型枠を使用することでできる木の模様がここでも壁の模様として見られた。触感はコンクリートだが見た目は木であるため不思議と木造ならではの空間の柔らかさを感じることができる。また自然に囲まれた土地であるため、外部とのつながりも感じた。

F9. 建築見学をしての感想

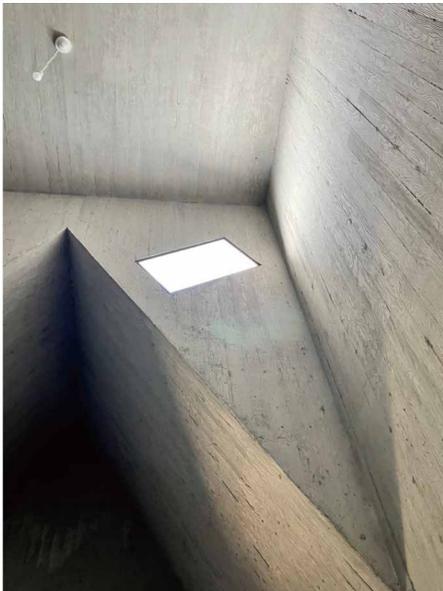
今回は10名以上で行動していたため静けさを感じる機会は少なかったが、アートパビリオンでは最初に建物に入ったため、誰もいない空間の静けさや声の響き方を感じることができ、一瞬ではあつたが自然の中での静けさとは異なる無音に近い静けさで落ち着く感じを体感することができてよかつた。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

先端の空間で、大きな壁が天井から降りてきていることで視界が遮られ、壁を越える瞬間に空まで視界が開ける体験は心が動いた瞬間であつたと思う。あえて壁を設けて一度景色を隠すことで一気に景色が広がるため、入ってすぐに空が見えるよりも感動が大きいと感じた。

思惟園教会 (Saya Park/SAYUWON, Naesim Nakwon)
Álvaro Siza and Carlos Castanheira

中村 優花



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

周辺環境として山の中では中間のあたりにあり、比較的周りにほかの建物も点々とある環境となっていた。背の高い樹木は少なく低木が多い。よって光を取り入れるには障害物はない。また、光としての障害物だけではなく、視界としての障害物もないと感じた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見たとき、開口部の少ない閉じた建築物となっているという印象を持った。また、外壁はきれいな白色であったため、屋根の重なった輪郭や、空と壁との重なりからくる輪郭から全体的に輪郭が薄いと感じた。そのため、線の少ない建築物であった。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

入り口から内部に入る瞬間、外部による白い壁が光を反射するような比較的眩しい空間から薄暗い空間へと引き込まれるような感覚があった。三角の屋根部分が自然光の入る開口部を隠しつつ、十字架へと視界を開くような感覚があった。

F4. 至近距離で何を感じるか

教壇の前に祈る人の目線でしゃがんでみると前に置かれている医師が見えなくなり、視界の情報としては教壇と自然光により照らされている十字架のみとなった。よって、祈る人が入った瞬間に祈るまでの動線が簡潔で自分の祈りの時間を過ごすことができるのだと感じた。

F5. 内部と外部の関係性

内部は比較的植物などの障害物はないため、自然光が直接入りやすい。しかし内部による自然光の入る箇所が一つだけの開口部であり、ドアから漏れる淡い光のみであった。そのため、内部と外部の空間は祈るために閉じた関係性がありつつ自然光を取り入れさせる関係性であると感じた。

F6. シークエンスの展開

入った瞬間、三角の屋根によって中心へとまっすぐに視界を誘導されて、照らされる十字架の方向に視界が開くシークエンスの展開となっている。さらに、教壇に祈る人を視点としてしゃがんだ時、教壇と十字架しか見えなくなるという空間の開きになる。その瞬間祈りの空間が成立しているように感じた。

F7. デティールが心に与える印象

内部による唯一の光を取り入れる開口部から直接十字架を照らしているのではなく、開口部の反対側の壁によって光を少し曲げたように反射させて十字架を照らすというデティールが印象に残った。その光一つで教会の内部は成立していると感じた。

F8. 建築に使っている素材について

外部の素材は真っ白な外壁であり内部は木材を転写した全体コンクリートが利用されていた。外壁の白は汚れなどがあまり感じられなく、真っ白な外壁であったため、輪郭が少なく見える目の錯覚を感じる事ができた。また、内部は展望台などと同じく自然と一体化させるように具体性を出している。

F9. 建築見学をしての感想

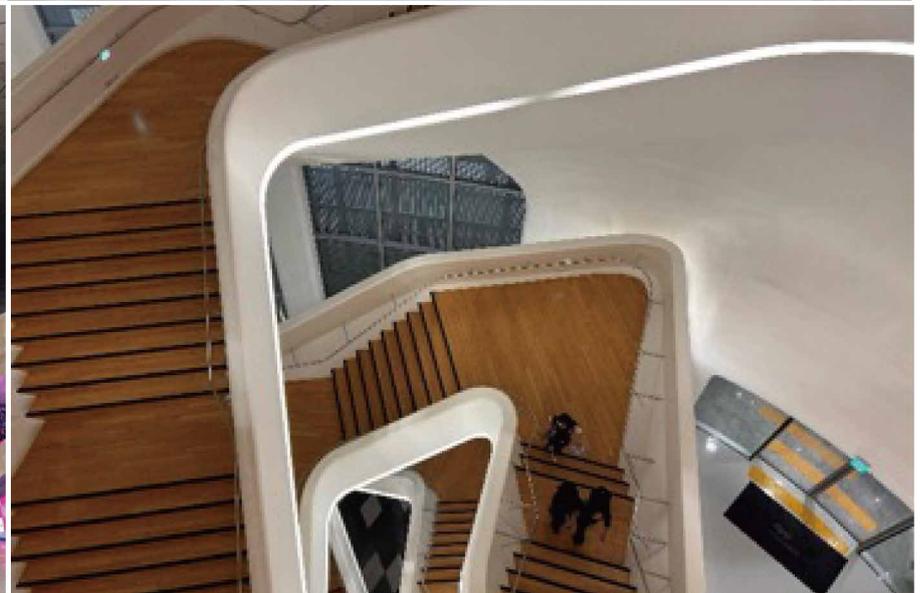
韓国の見学した建築の中で一番規模が小さく、動線も直線で短い建築物であった。規模が小さい中での空間の見せ方、光によって生み出される空間について学ぶことができた。また、利用者の目線ではまた違った見え方ができることが興味深いと感じた。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

私は内部の教壇の前でしゃがんだ瞬間が入った時と全く印象が違っていると体験できた場面で心が一番動いた。入った瞬間でも薄暗い中、一つの光が淡く入っているという印象が強かったが、しゃがんだ瞬間視界の中には教壇と十字架のみとなる瞬間本当に自分の祈りだけを祈ることができる空間が完成するという感覚があった。

DDP 東大門デザインプラザ見学 (Dongdaemun Design Plaza)
Zaha Hadid

亀山 月菜



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

重力に逆らった造りや、曲線が多く使われているところや、開口部が遠くからでは見えないようになっているところに抽象性が現れており、周辺とは明らかに違った造りで更に抽象的に見え、目立っていた。建築物が近未来的であるため、自然との調和は無かった。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見ると、周辺の建物とは明らかに違った造りで目立っており、近未来感を感じた。曲面が多く、角が全然見えなかったため抽象的な建築物だと思った。また、横長の建築物であったので全貌はかなり遠くからでないと、見えずその大きさに驚いた。

F3. 近づく際の動的变化に伴う心の動き

遠くから見ても、近づいて見ても、建築物のカーブや重力に逆らって飛び出している部分から近未来感を感じた。近づくにつれて建築物の規模に驚き、圧倒された。建築物の高さがとても高い訳ではないが、自分の上にやや飛び出しているので圧倒された。

F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離で見ると、小さな穴がパネルに開いており、開口部の役割をしているところは他の建物と同じだと思わせるが、そのような方法で開口部代わりをしているところに新しさを感じた。また、重力に逆らって飛び出していたところが、思っていたよりも大きく現実的に思えず、近未来感を感じた。

F5. 内部と外部の関係性

外が見える開口部がほとんど無く、内部と外部は空間が完全に分かれているように感じた。ただ、外観の抽象性が内部にもあり、統一されていた。その抽象性が内部と外部の共通点であり、抽象的に繋がっているのではないかと思った。

F6. シークエンスの展開

コンクリートの打ちっぱなしが下から立ち上がっており、外からは中の様子が見えにくく、スロープを降りていくと、重力に逆らって飛び出している部分が一気に見えた。そこでは、重力に逆らった近未来的な雰囲気を感じるとともに、現実的ではない珍しい造りに驚いた。地下に入る形で進ませそれぞれの棟に入る流れであった。

F7. デティールが心に与える印象

外壁にあるアルミのパネルに小さな穴が無数に開いておかげで、大きな開口部が無く、より現実離れた空間をつくりだしている。この現実離れた空間が近未来を感じさせる。また、内部の階段の曲がり方が無造作で、手すりが折れ曲がっていたことから抽象性を感じた。

F8. 建築に使っている素材について

外壁にはアルミのパネルが約 40,000 枚使用されており、近未来的な雰囲気を出していた。コンクリートの打ちっぱなしも外部には使用されていた。内部は、床や階段などには主に木材を、壁は白く塗られているところが多かった。

F9. 建築見学をしての感想

重力に逆らっていて、抽象的な建築物で見ていて楽しかった。見学をしていた時は雨が降っており、天気が優れなかったもので、もっと天気の良いときに見たら、また見た目が変わるのかなと思った。また、全体をじっくり見ることも出来なかったもので、行く機会があればもう一度見て心の動きを感じたいと思った。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

柱などの支えなしに飛び出していた部分を近くで見た瞬間である。遠くから見ても、それほど建築物が大きく見えなかったのであまり強く思うことは無かったが、近づくとその規模感に驚き、現実的ではない造りに面白いと感じた。

松隠アートキューブ (ST International HQ and SONGEUN Art Space)
Herzog & de Meuron

久保 亞彩華



Focus

F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

周辺の高いビルが多く人通りも車通りも多かったまた道沿いにあるため人の視界に入りやすいため目立つ場所に立っていると感じた坂が多い場所によりその坂の上のほうにあるため建築の高さがより目立つと感じた。また普通のビルが多いので外観が違う建築物なので目を引くと感じた。

F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見ても他より建物高さがありまた建築物の上部が三角形になっているため。その尖った部分しか見えないのですごく違和感があり目を引くと感じた遠くから見ても外壁が他と異なるので自然と目が行きやすいと感じた。

F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づくくと道路に面した壁にシンプルなデザインの開口部があり他とはデザインが違うため意識がそこに集中すると感じたまた外壁模様があるのがしっかり目でも確認できるので何か他と違うことに近くでしっかりとみたいと感じた。

F4. 至近距離で何を感じるか

近くで見た時に外壁の模様間近で見ると木目が刻まれておりその模様から周辺にはない自然を感じ取れる感じた。またインフォメーションまでの道のりが四角を切り抜いたような形になっておりその部分に柱がないので宙に浮いているように見え浮遊感を感じた。

F5. 内部と外部の関係性

遠くから見た時は内部の様子が見えないので関係性が途切れているように感じていたしかし内部に入った時は見えないところに開口部がありそこから自然とのかかわりを感じるところが多かった特に螺旋階段部分は無駄な柱がないので外の境目がいまいになっており内外の関係性がよりよくわかるどころだと感じた。

F6. シークエンスの展開

作品を見て回るときに 1 階から 2 階に行きそこから地下に下ろされ地下に降りると突然真っ暗な空間を通り大きな吹き抜けから光が入ってくる場所に出るので感情の変化が大きいと感じた。地下に行くにはエレベーターを使って向かいます、エレベーターが開いた瞬間暗い空間に放り出されるので不安感があるが吹き抜けのある大空間にたどり着いたときに安心感と不思議な感覚になった。

F7. デティールが心に与える印象

エントランスに入った時はあなたの状況が全くまだ見えないので螺旋階段を上がっていくのがとてもワクワクする感覚になった小さい空間の中で作品を見ながらぐるぐると二階まで足を進めていくのが面白いと感じ、そこから地下に下ろされるのもルートが読めず感情のコントロールされているように感じた。

F8. 建築に使っている素材について

主にコンクリートを使っているが外壁に使っていたコンクリートと天井に使っていたコンクリートが全く違うものであると感じた前に使っていたコンクリートは木目が刻まれていて天井に使われているコンクリートは光沢感のあるものが使われていたのでその場の見せたいものをいかに目立たせるかによって種類を変えているのだと感じた。

F9. 建築見学をしての感想

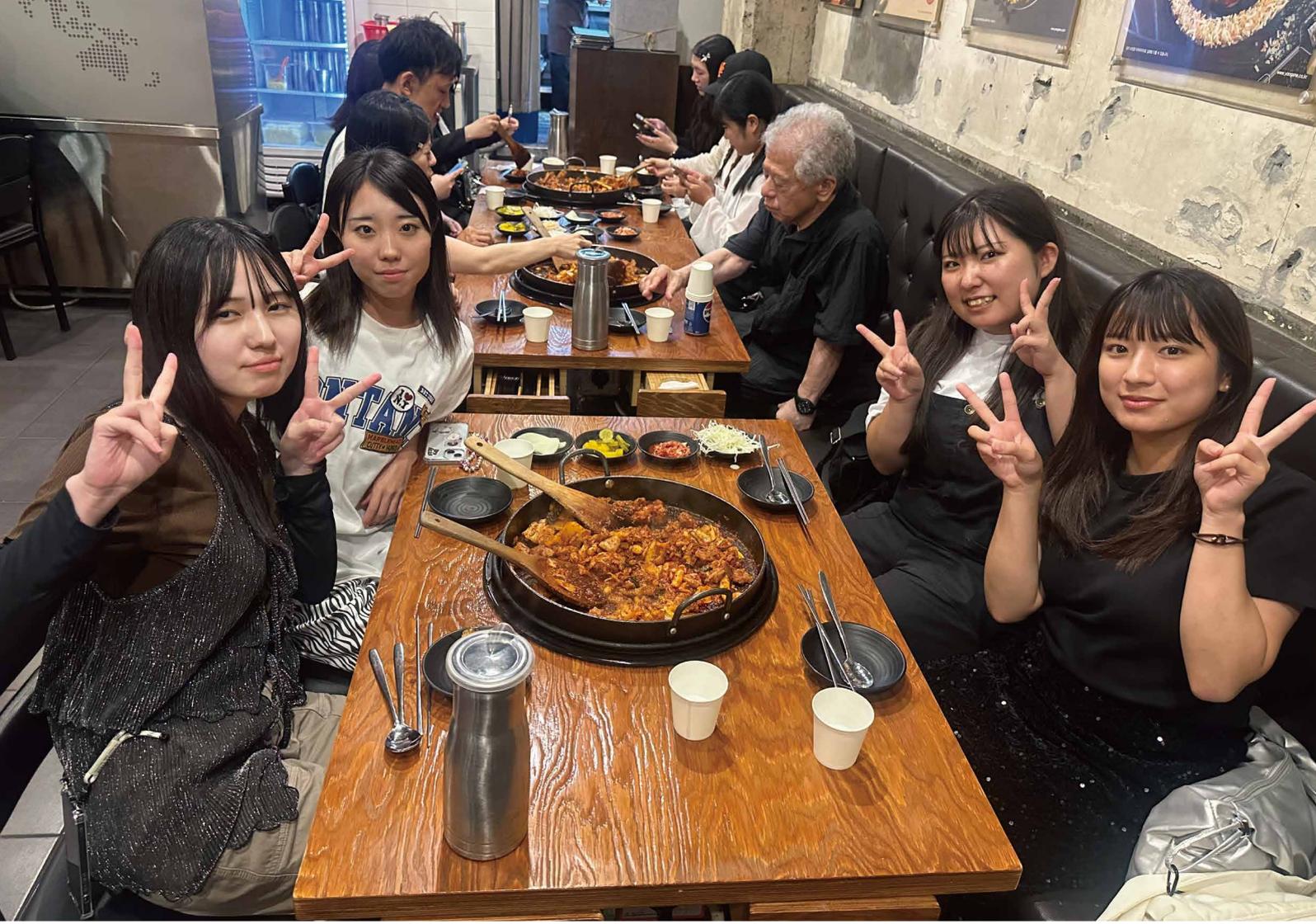
都内のビルにある美術館からは想像もできないほど空間が洗練されており現地に行かないと感じ取れないものがあると見学しながら分かった写真を見て言って地下の空間は写真で見てもすごく惹かれるものがあつたが自分自身の足でルートをたどって行くことに意味があると感じた。

F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

地下の部分は音がすごく響くようになっていて、その時たまたま展示していたオペラの音が響き渡っている空間にとっても不思議な感覚になった耳から入ってくる情報があることによって空間の大きさもより伝わってくると感じた。暗い空間から吹き抜けのある空間に行くときは不安感があつたがわくわくとした感情になった。









2024年 韓国建築見学実習

ライフキャリア特別セミナー I

編集：広島女学院大学 人間生活学部 生活デザイン学科 建築士課程

表紙デザイン：Storm Graphics 嵐川 真次

発行：2025年1月

本誌掲載の記事、写真、ロゴ等の無断転載・複製を禁じます。

HIROSHIMA JOGAKUIN
UNIVERSITY

Human Life Studies
Department of Living Design
architect course

Overseas architectural
practice